

読書

都市をつくる風景

中村 良夫著



中村良夫
都市をつくる
風景

この
冊

(藤原書店・2500円)
▼なかもむら・よしお 38年生まれ。東京工業大名誉教授。日本道路公団技師として実務を経験した後、研究活動に入った。著書に『風景学入門』『湿地転生の記』など。

新たな庭園文化を開花させた例もある。たしかに疎水沿いの哲学の道は京都に新しい山水都市の魅力を付け加えている。

しかしその後の日本の都市は個別の都市問題を解決するためのタテワリの要素技術は開発してきたものの、これらを統合して魅力的な都市の姿を提示することには熱心でなかった。著者は山水都市に住む生活者が本来持っていた風流や社交といった身体感覚・生活感覚から出発することによって、この統合を実現しようと提唱している。風景がその触媒役になれるという。かつて庭園を育むように都市を営んできた感性に

風景手がかりに理想的な姿を提案

を、風景を手がかりに、根源的に都市文化の視点から見いだそうとする本書は、愛国の書であると同時に提案の書でもある。

かつて美しかった日本の都市風景

は近代化の中で乱雑で脈絡なく改変されてしまった。なぜそうなったのか、そこから回生する道筋はあるのか、という問いを、景観整備とい

った技法の問題としてではなく、自然と市民生活とを手がかりに解いていく。

固い空間を構築する西洋の都市とは異なり、日本の都市は町家の坪庭から社寺境内のみどり、各所の庭園的な風景まで、生活の至る所に自然

を取り込んだ空間を持っている。生活の風情も市中の山居を楽しむ感がある。著者が「まち二つ」と呼ぶ、都市内にあふれ出した身近な自然が

随所に存在する「山水都市」であったという。近代にあっても琵琶湖疎水のように殖産興業の推進と同時に

学べという。風景として切り取られ、理解される都市空間の見方を編集することを通して、魅力的な都市の再生が果たせると説く。

だから書名にあるように、都市が風景をつくるのではなく、風景が都市をつくるということになるのだ。

《評》 東京大学教授 西村 幸夫